様式第 14 号　研究内容報告書

研究テーマ	伊勢崎銘仙『娘三人いれば蔵が建つ』は本当か？
研究者・団体名	伊勢崎銘仙の記憶を紡ぐ会
研究要旨	群馬県では 19 世紀末から富岡製糸場を中心に絹産業の近代化が興り、桐生ほか織機導入に影響を与えた。その一方で、伊勢崎は農村経済に埋め込まれた家内制手工業のままの機織りの状態が残存するという重層的な形態が維持された。本研究は、1920 年代の昭和初期に普段着として大衆需要を掌握した絹織物「銘仙」の中でも、特に華やかな色柄で人気があった伊勢崎銘仙について着目し、その生産構造に女性の労働はどのように行われていたのかを明らかにし、この地域でお年寄りが銘仙を語るときに口にしていた『娘三人いれば蔵が建つ』という言葉の意味について考察した。

研究内容

1．研究の内容

はじめに、本研究で検討することがらについて、その概略を述べる。

・開発経済や東南アジア研究において、アジアの経済成長と女性の労働は密接な関係があることが指摘されている（1）。

・日本の近代化の歴史を振り返ってみると、群馬県の富岡製糸場などでも多くの女工たちが動員され、のちに製糸場が全国に拡大し、生糸の海外輸出を支えた（2）。一方で、安価な絹紡糸の大量生産が可能となり、モダンアートなデザインと合わせて銘仙が大衆化していった。銘仙は今でいうファストファッションとも言えよう（3）。

・この銘仙は誰がどのようにして織っていたのだろうか。この問題について本研究は伊勢崎銘仙に着目し『娘三人いれば蔵が建つ』という言葉はどのような意味をもつのかについて考察することにした。

2．調査の方法

本研究における調査の方法は以下の通りである。

・文献調査　図書や google scholar などに掲載されている伊勢崎銘仙に関する論文を取集した。

・半構造化インタビュー：銘仙プランナーの金井珠代、金井正明らが中心となり、1930 年代に生まれ、伊勢崎銘仙の産業にかかわった人々に半構造化インタビューを行った。インタビュー結果はすべて文字おこしをした。今回はその中でも実際に賃機（ちんばた）をしていた女性たち 4 名を中心に論文を執筆した。

3．インタビューの記録の活用方法

今回論文作成に活用したのは以下の 5 人である。

A さん：　1939（昭和 14）年生まれ　兼業農家出身―23 歳で結婚、嫁家先も兼業農家　子ども 3 人

B さん：　1938（昭和 13）年生まれ　兼業農家出身―23 歳で結婚、嫁家先も兼業農家 子ども 2 人

C さん：　1936（昭和 11）年生まれ　兼業農家出身、父親が括り絣の自営業、嫁家先も兼業農家　子ども

２人
Ｄさん：　1936（昭和 11）年生まれ　兼業農家出身－26 歳で結婚、婚家先は元機屋で兼業農家　子ども３人
Ｅさん：1938（昭和 13）年生まれ　非農家だが母親は機織りをしていた―18 歳で緯糸巻きの会社へ就職、その後染物屋で糸巻、糸返しの仕事、24 歳で結婚して東京へ移住し機織りはやめてしまった。子ども２人

４．インタビューからわかったこと

本稿では半構造化インタビューをもとに、当時の記憶を紡いでいった。その結果、以下の４点が明らかになった。

（1）兼業農家出身の女性がほとんどで、機織りは母親が機を織る姿を見て覚えた。

たとえばＣさんの家は、父親が括り絣（縛り）をしていて、祖父と兄が農業、祖母と母が機織りをしていた。以下、Ｃさんは家の様子について以下のように述べている。

「だから、機屋さんはいろんな人が来たの。みんな「うちの縛ってくれ」とかさ。なんとかって機屋、境のイトイさんって言う方も来たんだよ、縛りの方で。アオヤマさんも来た、ずいぶん来た、何件も。だから忙しかった。糸がいっぱい、あちこちに。」

Ｃさんの父親は昼間にぜんぶ捺染を準備して夜なべで兄と縛り、母親が糸返しや管巻きして、Ｃさんと機織りをしたという。朝になるとまた加工屋（捺染屋）さんが出たり入ったりして忙しかったという。

また、Ａさんは小さい頃、母親の機織りの邪魔にならないように、注意されたことを記憶している。

「子どもの時は、親とかおばさんが織ってたんですよ。それで、機し（はたし）の周りをちょろちょろしてたみたいね。今にいっくらでも織らせるから、そばに来ては駄目だよと、糸を切るからと言われたのを覚えてるんですよね。そういうのは、織っているのは見てたから。」

Ｄさんも親の姿を見て機織りを記憶していると述べている。同時に、機織りが結婚の条件であったことも発言している。

Ｄ*「親がしてたから、それを盗んじゃ、上がっちゃ、機上がっちゃ」*
（質問者）「じゃあ特に教えてもらわないで？」
Ｄ*「教えてもらわない。見てて覚えた。」*
（質問者）「じゃあ小さい頃からお母さん、機織りしてたんで、そのそばで見てたから」
Ｄ*「そう」*
（質問者）「織れちゃう。今だと、機織りでも何でも学校があって、そこで習って・・・という」
Ｄ*「昔はだって、機織りを覚えなければ結婚できねえなんて時代があったんだからね。」*

では、なぜ機織りを覚えなければ結婚できないというようなことが言われていたのだろうか。機織りは農家の収入として貴重な財源であり、嫁はその役割を担うことが暗黙の了解で期待されていたからではないだろうか。次節ではこの点について女性たちの語りを追ってゆこう。

（2）機織りは家計にとって貴重な現金収入源であった。

インタビューをした４人の中で、嫁として機を織ることを一番期待されていたのはＡさんであった。Ａさ

んは、お見合いで結婚相手が決まると、婚家先の姑は結婚前には機織り（は大変だからと）機をどこかに預けて隠したが、結婚した年の秋の収穫が終わると、家の廊下を改築して織機を 2 台入れた。そしてＡさんは、姑の指導の下で機織りをするようになったという。Ａさんは姑に気を使いながら機を覚えていった時の様子を以下のように述べている。

質問者Ｂ「おしゅうとめさんに機織りがまた戻って来たじゃないですか。どこかに預けてあるのが戻ってきて」。
質問者Ａ　　「Ａさんのためにね、また。」
Ａ*「それを私が今度はその機し（はたし）で織るようになったわけよ。」*
質問者Ｂ　じゃあ、これを使って織りなさいよと。
Ａ*「そうそう。私がこちらで織って、嫁に行った秋も田んぼが終わったら、親戚に大工さんがいるから、その大工さんを頼んで、廊下をこのくらい広い廊下を造って、私が入るだけの。こちらが私でこちらがおばあさんで、2 台で機し（はたし）で。それで、付いていて分からないところは教えて、やってたんですよね。だから休む暇も、トイレに行きたくも我慢してなくてはいけないし、おばあさんがこちらで織っていれば同じ、一人で習ってるんならいいけど、そういうあれだったんで。」*

Ａさんによると、このお姑は婿取りだったので家の中でも発言権がある人だった。Ａさんが嫁いでしばらくすると、さらに機織りと御蚕をする別棟を建てて、Ａさんが機に専念できるようにした。また、水仕事をすると手が荒れてしまって糸をひっかけてしまうので、姑は食器洗いと孫の面倒を見て、出来るだけ長くＡさんに機を織るように促していた。嫁の機織りの賃金はそれだけこの家の家計にとって重要だったのではないだろうか。この賃金が重要だという点について、Ｄさんは次のように発言している

Ｄ*「ええ、それはずいぶんいたよ、昔は。もう、軒並み機屋。もう、でも、ほら女の人がいれば必ず機織りはしてたからね。それで、どこのうちでも糸関係にかかわっていたうちが多いの。何かしらの、だから、やっぱり、ほら、お金の回収が早いから、みんなそれに、ほらね。」*
質問者「農家よりも確実に」
Ｄ*「そう、**やれば確実に現金になるから。**」*

このように、当時は娘が機を織ればすぐ現金が入り、金回りが良かったと考えられる。他にも B さんの家では母親と B さんが機織りで日銭を稼いだので、魚屋さんが村に売りに来ても好きな魚を買うことが出来たと述べている。

「魚屋さんがくると、近所の人は「じゃあ」なんて言って（帰ってしまうが、魚を買っているＢさんの母親を見て）、「ああ、いいねえ。日銭が入るから買えるね」なんていうおばあちゃんもいましたよ。だって、昔の農家はお米、農協でその時期（収穫）になんなきゃ（現金が）入らないだろうからね。半年くらいは、もうね・・・。」（カッコ補足は筆者）

以上のことから、機織りは農家にとって貴重な現金収入の仕事であり、娘、そして嫁として、女性は家族のために機を織ることが期待されていた。したがって、機を織ることは嫁入りの条件でもあったのだろう。

（3）機織りの仕事は長時間で気が休まらないが、機織りで得た現金は親や姑に渡した

とはいえ、機織りは長時間で気が休まらない集中力を要する作業であった。Ｂさんは当時の苦労を次のよう

に述懐している。

B「*だけど、もう、機織りってのは時間がないんですよ、自分のゆとりがね。朝、起きれば、ずっと夜まで暮れなんつったら、もう 12 時過ぎて。みんな、競争ですよ近所。*」

Bさんは機織りの期限があると、朝 5 時頃から起きて夜は 10－11 時まで織り続けた。休憩はご飯を食べる時間くらいで、休んでも早く織らなければと気が気ではなかったという。そのため、5 人兄弟の中で自分一人が機織りをしていることが嫌になり、勤めに出ている姉が羨ましくて、結婚前（昭和 27－31 年）に外で織物関係の会社に就職した。同じ機織りの仕事とはいえ、時間が決まっていたので、家で機を織るより楽だったという。

B「*だから、もう勤めは自分の時間があるんですよ。勤めから帰れば、もう。機織りは、朝起きれば夜寝るまで、もう、やんなきゃはかどんないもんだから、それが一番嫌だったの機織り。自分の時間がないから。*」

以上のことから機織りは家計の補助、現金がすぐ入るという意味でとても「重宝」していたと考えられる。また当時の伝統的なジェンダー規範の中で、嫁―姑の権力関係の中では、姑が嫁に機を織らせるということもあったことがAさんの体験から理解できる。では彼女たちの労働の糧（織賃）は誰が管理していたのだろうか？たとえば娘として機を織っていたBさんは、機織りの代金はすべて親に渡したという。

B「*お小遣い、それが昔で（Bさんは）真面目だから、いくらでもなんないけど。みんな、うちに入れちゃうんですよね。最後に、いくらか自分の小遣い。そうすっと、親が喜ぶんですよ日銭が入るからね。*」

B「*だから、魚屋さんなんて来ると、もう機織ってなければ「現金がないから買えないよ」なんて、よく近所の人がいうんだけど、（Bさんの家は機織りで）そういう日銭が入るから、行商人が来ると買えるんです。だから、親も「助かった」なんて。*」

一方、姑の力が強かったAさんの場合は、Aさんが織った機織り代金はすべて姑の手に渡り、一家の家計管理、いわゆる所帯回しも姑がやっていた。質問者が機屋さんが出来上がった織物を取りに来るときに、その賃金を誰に渡すのか、と聞いた質問に対しては、次のように答えている。

A「*いえ、私に寄越すよ。寄越すけど、おばあさんにやらないと気に入らないんだよね。ある時、おばあさんがいないからおじいさんにやったら『父ちゃんなんかにやることねえんだ』と、おばあさんが怒ってるんですよね。それで、旅行は好きで旅行は行きたい放題行って、おじいさんが入院してたって何だってかんだって勝手に（旅行に）行ってしまった、おばあさんは。そういう機織りの金を自分の旅行に使ってたんじゃないかな？*」

質問者「それじゃあ、（Aさんの」お小遣いは・・・。」
A「*お小遣いって、月幾らって少しもらってただけで、そんなもらってないですよ。*」
質問者「じゃあ、家計はおばあちゃんが全部。」
A「*お父さんも（鉄工所で働いて）生活費を入れてたし。おばあさんが握ってたんですよ、だから、**私は何のために働いてるか分からなかったんですよ。***」

（4）嫁として機織り以外の農作業や家族のケア労働も担った

さらに、嫁として機を織っていた女性たちは、機織りの他に様々な家族に関わるケアもしなければならなかった。たとえばＡさんの場合は、孫の面倒と夕飯づくりと食器洗いは姑にしてもらったものの、朝 4 時半か 5 時には起床して朝ごはんの支度ほかの家事、舅の入院や介護を担っていた。

Ａ　*「おじいさんは割と弱い人だったんですよね。胃が悪い、すぐ胃潰瘍が起きたり何だ、ちょいちょい入院したりなんかしてたから。おじいさんが入院してもおばあさんは旅行に行ってしまったし、病院に行くのは私に任して。退院すると言ったっていないんだから、おばあさんは旅行に行ってて。婿取りはいいよね。」*

Ｄさんも寝たきりの舅を 8 年家で面倒を見て看取っている。8 年間、舅が入浴の際には負ぶってお風呂場に連れていき、入浴介助をおこなった。姑もいたが、どういうわけか、全然手をかけてやらなかったという。さらに、嫁ぎ先も兼業農家であったことから、機織りは農閑期に集中しておこない、田植えや畑仕事、御蚕の餌やりもやらなければなかった。従って、彼女たちは農閑期を中心に賃労働（ペイドワーク）として機を織り、農作業を手伝い、家事や育児、介護などの非賃金労働（アンペイドワーク）を行うという重労働であったと言えよう。

５．考察

以上のようなインタビュー結果から考えられる結論は以下の通りである。まず、調査対象者たちは全員母親が織る様子をみてその技術を覚えた。彼女たちより一世代前の親たちはちょうど銘仙のピーク時に機を織っていた人々である。その世代の技術は次の世代に受け継がれていたと言えよう。しかし、大島秀幸が 1970 年代になると伊勢崎が都市化とともに近郊に工場ができ、余剰労働がそこに吸収されるようになったことが伊勢崎銘仙の衰退につながったことを指摘したとおり、インタビューをした女性たちの次の世代は、銘仙の衰退とともに機織りには執着せず、近代化や都市化の波にのって、近隣の工場にパートに出た。そのため、この技術の伝承は、彼女たちの時代で途切れたことになる。

従って、これまで見てきた通り、彼女たちの織る技術は「女性だから生来備わっている」能力ではない。幼少時代に機織りに日常的に触れて、観察し、次第に獲得していった技術である。機織りは誰でも出来る簡単な技術ではない。にもかかわらず、その技術の高さや、獲得するまでの過程は「自然に身に付くもの」として実際には勘案されてしまうので、賃織りの価格は低く抑えられていたと考えられる。また、農閑期に農家の女性たちが、家の仕事の合間にやる機織りであるということも、長時間根を詰める作業にもかかわらず、機織りの価値が引き下げられることにつながったと考えられる。銘仙の価格が安く大衆化された理由は、原材料が絹紡糸だったからというだけでなく、こうした織子たちの人件費の抑制がジェンダーバイアスによって作用していたと考えられる。

とはいえ、機織りの賃金は、どの家計にとっても重要であった。親も婚家先の姑や舅も、女性の機織りの現金収入を喜び、当てにしていたと考えられる。農産物を収穫して農協などに卸さないと現金収入が入らない農家にとって、機織りは必要不可欠の仕事であり、だからこそ「娘三人いれば蔵が建つ」や「機織り上手を嫁にもらえ」という言葉が、今も残っているのだと言えるのではないだろうか。そして、女性たちもそのことを「当たり前」として受け入れ、幼少の頃から母親の姿を見て「自然に」機を織ることを覚えた。そして、家族を支えることを「良きこと」として、機織りに精を出したのだ。彼女たちは「良き娘」、そして「良き嫁・妻・母」として一生懸命生きてきたといえよう。

今回は 4 人の銘仙の織子さんと 1 人の緯糸巻きの女性から、当時の銘仙の記憶を紡ぐことができた。今後は男性も含めて、銘仙が地域で分業化された生産過程において、どのような人がかかわっていったのか、その暮らしはどうだったのかということをさらに深めていきたい。

註

（１）Diane Elson and Ruth Pearson, “ ‘Nimble Fingers Make Cheap Workers’:　An Analysis of Women’s Employment in Third World Export Manufacturing”, Feminist Review, No.7(Spring, Sage Publication, 1981). HORI Yoshie, Filipina Women’s Resilience and Survival Strategies in the Global Economy: Focusing on Japan-Philippines Relations Since the 1970, Japanese Political Economy, Vol.48 No.2-4(Routledge,2022). 長田華子『バングラデシュの工業化とジェンダー　―日系縫製企業の国際移転』御茶の水書房、2014 年。

（２)伊勢崎銘仙プランナー金井珠代「絹 100%　銘仙の原材料は絹紡糸」『上毛新聞』https://www.jomo-news.co.jp/Ａ　rticles/-/14185（2023 年 1 月 1 日閲覧）

（３)明治の近代化を支えた富岡製糸場の女工については　榎本一江「日本資本主義と女性労働―富岡製糸場の事例から」『経済志林』第 89 巻、3 号、2022 年。サンドラ・シャール『『女工哀史』を再考する―失われた女性の声を求めて』京都大学出版会、2020 年などが挙げられるが、農家の副業的な家内工業に従事し、工場労働者に数えられなかった織物に携わった女性たちの研究については管見の限り存在しない。

参考文献

伊勢崎織物協同組合『伊勢崎織物史』(伊勢崎銘仙会館、1966 年)。

大島秀幸「地方都市における周辺農村の兼業化―伊勢崎市の場合」『新地理』13 巻 3 号(1965 年)。

張娟・関上哲・范作冰・小野直達「伊勢崎織物産地の生産構造に関する一考察」『日本シルク学会』第 18 巻、3－7 号（2010 年)。

辻本芳郎「関東西北部山麓における機業の生産構造（その１)」『新地理』6 巻、3 号（1958 年)。

独立行政法人中小基盤整備機構編)「伊勢崎織物産地（伊勢崎織物工業組合)」『全国生産地概況調査』(独立法人中小基盤整備機構、2008 年)。

長田華子『バングラデシュの工業化とジェンダー　―日系縫製企業の国際移転』御茶の水書房、2014 年。

廣田政一「日本の近代化と絹織者産業（II)」『目白大学人文学研究』第 12 号、(目白大学、2016 年)。

Diane Elson and Ruth Pearson, “ ‘Nimble Fingers Make Cheap Workers’:　An Analysis of Women’s Employment in Third World Export Manufacturing”, Feminist Review, No.7(Spring 1981).

HORI Yoshie, Filipina Women’s Resilience and Survival Strategies in the Global Economy: Focusing on Japan-Philippines Relations Since the 1970, Japanese Political Economy, Vol.48 No.2-4(Routledge,2022).

（新聞記事・ネット記事）

・伊勢崎銘仙プランナー金井珠代「絹 100%　銘仙の原材料は絹紡糸」『上毛新聞』https://www.jomo-news.co.jp/Ａ　rticles/-/14185（2023 年 1 月 1 日閲覧）

・伝統工芸士　伊勢崎絣　染色部門松本品蔵さん http://chobee.jp/pp/060501/　（2023 年 1 月 3 日閲覧）

【謝辞】本稿は、銘仙プランナーの金井珠代・正明さんから銘仙の生産過程や専門用語、資料ほか様々なことを教えていただけたからこそ完成することができた。また、インタビューに快く応じてくださり、自分のこれまでの経験を率直かつ朗らかに語ってくださった女性たちに心からお礼を申し上げたい。